真・恋姫無双　～龍紋背負いし者～

miyabi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　～龍紋背負いし者～

【Ｎコード】
Ｎ９１８５Ｔ

【作者名】
ｍｉｙａｂｉ

【あらすじ】
不運と失敗を重ねた少年は戦乱の世に巻き込まれる。
孤独の中、彼は彼の唯一の少女に出会う。
彼はコブシに思いをのせて乱世を走り出す

不幸×失敗のち異世界（前書き）

小説なんて始めて書くので軽く読んでやってください

不幸×失敗のち異世界

月が満ち、世界が月に照らされていることをしった晩。俺は初めて本当の恋を知った…

俺ｓｉｄｅ

今朝はいつもより体調がよかった俺は普段より早くに鍛練をしていた。まだ１４歳の身体だから外回りの筋肉は付けすぎずに気功を中心に鍛えていた。

代々父の家は武家の家系だ。
俺自身格闘技が好きだった事もあいまって暇があれば主に祖父から稽古をつけてもらい、使う者の志を叩き込まれていた。

三歳頃から瞑想を始め、山篭もりなんかで自分や周りにある気への感性を持たされた。
五歳になるころに型や技の修業が始まり、十二になる頃には一通りの武を納めていた。

だからと言ってまだまだ研鑽を積まなければ達人と謳われた祖父にはおよばない。気功術では近づいてきたと思うが一つ一つの技の練度が違う（実際は体が出来ていないだけで数年で追い付くだろう）のでまだまだ鍛えがいがある。

一日の鍛練が終わると修学旅行で買ったお気に入りの着流しを着て外に出かけた。
始めこそからかわれたが今ではみんな当たり前のようにしてくれる。

（今日はどうしよっかな～。天気もいいし…あっ）

「山が俺を呼んでいる！！」

思い付いたと同じに叫び、駆け出した。

「やべぇ……遭難した」

修行僧が使う霊山をハイペースで四時間ほどでいき、いくつかの頂きを越えてそろそろ帰ろうかな～と来た道を戻ってきたはずがいつの間にか道を見失っていた。

「今日は野宿かなぁ……はぁ、っん？」

ーガサガサッー気配を感じたと同時に音がした。ゆっくり振り返ってみると……熊がいた。

「熊鍋ってあるけど熊焼きって言わないよな～」

のんきに言いながらも素早く後ろ足にに重心を移動させ構える。

「グォォー！！」

一気に襲い掛かってきた熊に対し素早くよこに回避、奴が振り向いた所をすかさず跳んで眉間に気を込めた踵落しを叩き込む。
奴が怯んだ隙に拳の連打を入れ、休ませない。
が、そのまま突っ込んでくる。それを跳び箱の要領で飛び越えるといきなり右肩にとんでもない衝撃がきた。

「なっ！？」

とっさに硬気功で受け、車にでもひかれたかなように吹っ飛ばされながらも受け身をとり続けダメージを和らげる。

（骨には支障ないか…）

状態を確認し、原因をすかさず見て思わず顔が引き攣る。

「二頭目きたー！！」

叫びながら一目散に山を駆け降りる。

（なんで二頭もくるのさ？！カンペキ死亡フラグ立ってるだろ！！
モンハンの連続狩猟じゃねぇんだよバカヤロー！！！）

～十分経過～

「はぁ…はぁ…方向までわかんなくなった（泣）」

必死の逃走でクマズからは逃げ切れたが完全に遭難してしまった

「とりあえず野宿する場所捜そ・・・ってなんだアレ？」

そこには小さな祠が奉られていた。

「なんでこんな山の奥深くに祠なんてあるんだ？」

面白そうな予感がしたので調べ始める。

中を開けてみると埃を被った風呂敷がある。

とりあえず開けてみた。

「うおっ。なんでこんなものがあるんだ？」

中身は名工だとうかがえる朱塗りの手甲に鉄履、そして鎖帷子が入っていた。

「誰もこない祠だろうしせっかくだしもらうか。遭難したのになんか得したな～」

よく考えずにつぎつぎあった装備を身につけていく、

最後に手甲を付ける前に鏡がある事に気がついた

「この品揃えで鏡？」

場違いな鏡に気を取られてに取る。

鏡には自分の顔が映っている。友人にはよく「顔と違ってお人好しな性格してるから、モテないんじゃないか？」

と言われるぐらい、短かめのツンツンした髪にそれなりにちょっと強気な眉の良い作りの顔なのにモテない。
強気な顔だが、学校では実力を隠し、穏やかな性格が災いしてギャップがダメな方に働いてるらしい。

そんな考えにげんなりして鏡を置いた。
そして手に手甲を嵌めた。

「！！なんだ突然光が！？あつっうっあっぐぁあああああああああああああ！！」

手甲に龍紋が浮き上がり、体が灼けつくされたような痛みが身体の内から皮膚一枚一枚に広がっていく

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタっイイタイイタイイタいイタいイイタイイタイイタい！！！！！！！）

尋常な痛みじゃなかった。まるで細胞ひとつひとつを灼いて新しく作りかえているとしか思えない。
一刻ほどして痛みが止んだ。倒れたまま体が実際に所々で裂傷が走っていたのを確認し、起き上がろうとしたら、フラつき、手に先ほどの鏡が当たってしまった。

パリーン！

音を立てて落ちて割れた。
そしていきなり割れた部分を中心に黒い穴が生まれ
今度こそ俺は意識とともに穴に落ちていった。

月夜の恋（前書き）

これは疲れる

月夜の恋

俺ｓｉｄｅ

「ん・・・、ここは・・・どこだ？」

意識が起き上がった。
時間はすでに夕暮れまじかだ。
周りを見れば、見渡す限りの森のような場所にとてつもなく長い川だった。

（山にいたのになぜ森にいるんだ？それにまず日本にこんな場所や川があったか・・・）

思考を巡らしているとふと水面に映る自分に違和感があった。

（そうだ！俺はここまで身長は高くなかった。せいぜい１７０になるかどうかだったはずだ。なのに今はどうみても１８０は確実にある！）

それ以外になにか変化がないかを捜していくと体に小さな切り傷か多く走っていた。

（身長以外にはたいした変化はなさそうだな、だがこれはやはりこの手甲せいか・・・）

「あ～もう！めんどくさい！！今考えてもわからん。とにかく結局野宿かよ・・」

気分を切り替え食い物の準備する。

珍しく運がいいことに、川があるおかげで食い物には困らなそうだし、俺自身がガキの頃から山で過ごすのは慣れてるおかげで火も大丈夫だ。

俺はさっそく着ているものを全部脱いで魚を捕まえに走った。

日が完全に沈み、魚の香ばしい匂いがしはじめた頃

（ん？ありゃ・・・人か！？）

数十個の松明のような明かりが見えてきた。そのなかで近づいてきた三個ほどから

「おい小僧！その食い物と服そして金目のもんをよこせ！！」

いかにも自分山賊ですってオッサンが出てきた。

さらに後ろから

「さすが兄貴！ちょっと強そうでも大勢だから威張れる姿に痺れる！憧れる～！！」

「（ぼ～・・・）・・・・そうなんだな～。」
褒めてのかけなしてるのかわからないチビと変なデブだった。
「とっととだせクソガキ！痛い目に合いたくなかったらな！！」
下貌たニヤケ顔でそんなことをいってくる。
（今どき山賊って存在してたの！？）
そんなことを考えながらも身体を戦闘体勢にもっていく。
「暗くて見えなかったが良い着物きてんな。斬って無駄にしたくねえな」
「・・・」
「とりあえず脱・がはっ！」
俺は隙だらけのエラソーなオッサンの顔面に軽く拳をいれた。
「いくらなんでも気ぃ抜きすぎだろオッサン」
と軽く挑発
「このガキ！！てめえらや「アニキ！奴が追いついて来ました！！」なをだと！？」
アニキと呼ばれた男は慌てて後ろを振り向く
向こう側から叫び声が微かに聞こえてきた。
「ちくしょう！せっかく巻いたのになんで見つかった！？こんなガ

キ相手にするだけ時間の無駄だ、いくぞチビ、デブ！！」

山賊達はとんでもなく早く逃げ出した

（いったい何が起こってるんだ？）

騒ぎの元が近づいてくる。緊張に汗を流ししっかりと前を見据える。

ガサッ！

斜め上、木の上から飛びだすシルエットに俺は心を奪われた・・・

月を背景に赤の髪が輝き女と想わせるはっきりとした凹凸に一瞬交わされた目すべてに魅了され動けなかった。

彼女は重さを感じさせず着地してこちらを向いた。

「・・・恋は呂布奉先」

ハッ！

「お、俺は鳴海、鳴海　椿だ」

「・・・椿」

ドキドキドキドキ！

「・・・・・・それ、食べていい？」と魚を指さして

ク～～

かわいい音が鳴った。

月夜の恋（後書き）

感想お願いします

思いと覚悟（前書き）

この話しは一刀がくる数年前の話しになるので、当然恋も年齢は下がってます。

思いと覚悟

椿side

「要するに、呂布達は軍で賊を討伐にいっていたけど呂布だけ一人途中で仲間とはぐれてしまったから、とりあえず賊の追撃をしていたけど、食べるものがなくなっちゃって、食い倒れそうになっていたと。その時俺の焼き魚の匂いに惹かれて来たら、賊が邪魔して来たからついでに討伐していた。ってことでいいのかな？」

「モキュモキュモキュ（コクコクコク）」

かわいいな～

脇目も振らずに食べてる姿に癒されるよ～

「もう少し魚とってこようか？」

「！！コクコクコクコク！！」

ほんっとかわいいな～♪

「じゃあちょっと待っててくれよ」

「おっと、こっれで六匹めッと」

大漁大漁～
「とりあえずこんなもんかな」
いや～なんか今までの人生で一番充実してんな俺。
正直もうずっとこのままでいいな～
でも、あれ？なんか呂布のことが気になりすぎて何か忘れてるような
・・・・・・・・・・・・・・・？
ハッ！
「あああぁぁーー！！すっかりここがどこか聞くの忘れてた！？」

おお、いたいたいたっと
素早く取った魚を串刺しにして土にさして呂布に向き直る

「少し呂布聞きたい事があるんだけど、いいかな！？」
「？コク」
「俺たちがいるここってなんで場所なの？」
「・・・恋、も迷った。わからない」
おっと、聞き方を間違えたな
「じゃあどこの都市から来たの？」
「・・・洛陽」
知らない地名だな・・・
「じゃあここから一番近いと思う都市はどこかわかる？」

「・・・たぶん、宛」
さっきから漢字っぽいし、中国なのかな？どこか景色もそれっぽいし
「　そこが一番近い人がいる場所なんだ。」
「（フルフル）いくつか、村がある。」

村ときたか・・・よし、覚悟決めるか！！

「俺って少し前に東国の島国から来たばっかで国の名前を正確に覚えて無いんだよ。
なんだったっけ？」
うん、ウソはついてないぞウソは。

「・・・・漢」

アデゥ～俺の常識、ウェルカム～非常識～・・・・・・・
そろそろ現実に戻るか。呂布がおかしな人を見るような目で見てくる前にな

「あ～ごめんな変なこと聞いた上に固まってて、ちょっと世界平和について考えてたんだよ！」
「・・・・椿、えらい」
「すいません！ウソつきました！！そんなカッコいい事考えてませんでした！！」

思わず速攻でＤＯ・ＧＥ・ＺＡ展開する
だってしょうがないじゃん！疑いもせず見てくから罪悪感で死にそうになるんだよ！？

「・・・・椿、ウソよくない」

「ううっ、すいません。」
「（クスッ）・・・でもちょっとおもしろい」
「っえ！」
すかさず顔を上げる。
出会ってからも変化がほとんどない彼女の口元がうっすら笑っていた。
それにおもわず惚けてしまう。
「・・・・椿」
「・・っえ、あ、あ～うんなに呂布？」
あわてて構えなおす
「恋でいい。」
「っえ！？」
「これからは恋のこと恋でいい。」
「さっきから気になってたんだけど、呂布奉先が名前じゃないの？」
「・・・椿、真名知らない？」
「真名？」
呂布に真名のことを教えてもらう
「家族や大事な人にしか教えない名前か。でもそんな大事な物を俺なんかが呼んでもいいの？」
「・・・椿、いい人。ご飯いっぱいくれた。」
「・・・・・それだけ？」
「・・・それにおもしろい」
おもしろいって褒められてるのかな？

照れて顔を少し赤くしながら
「俺には真名なんて大層な物はないから、これからも椿で頼む」
「（コク）わかった」
「よろしくな・・・恋」
「・・・・ん。」

その後、恋は軽く魚全部を食べて寝て

「腹っへた～（泣）」
腹を押さえる男が静かに鳴いた。

恋ｓｉｄｅ

今日は昨日逃げた山賊達を追うことになった。
隣で椿が並んで歩いている。
昨日会った椿がいっしょに来たいっていってきたので恋はうなずいておいた。

昨日から椿は恋に優しくしてくれる。なんで？って思ったけど、優しいからかな。と結論ずけた。
恋は恋自身が他の人とは違うことに気がついてた。

話ていてもすごく疲れた顔をされることが少なくなかった。
霞や詠は始めの方だけであまりない、月は一回もそんなことがない。
椿も一度もそんな素振りがない、なぜか自分の空気に合う。
そんな気がした。

「恋、あそこの村で煙が上がってる！」

恋は視線をすかさず上げた。

「昨日の賊達が襲っているのか？」
「・・・・そう思う」
「かなりの人数がいたはずだ・・・走るよ恋！」
「（コク）」

椿に追走して走り出す。
自分とおなじ速さで走る椿におもわず驚く。
強いんじゃないかな、とは思っていたけど、自分の本気と同じ速さで走れるとは思ってなかった。
それに涼しい顔とはいかないがあと少しなら速く走れそうな顔だ。
（・・・恋より強い？）
と横目に椿の顔を見ながら考えていると

「恋、俺がまず囮で突っ込む。奴らの意識が完全に俺に向いてから不意討ちをしかけろ。」
「・・・・椿危ない」

いくら自分でも四方塞がったままじゃ戦えない。
それは椿もおんなじはずだ。

「まぁ、何とかなるさ」

優しく微笑みかけてくる
キュッと一瞬胸がざわついた
（？？）
それに不思議に思っていると

「恋は少し速度を落として、隙を見てからきて。じゃあ、一足先に暴れてきますか！！」

そう言うと椿はさっきより少しだけ速く走り出してしまった。

椿ｓｉｄｅ

せっかく恋にいいところを見せるチャンスだ！
本気で蹴散らす！！

村に入り逃げる男に斬りかかっている男に手始めに飛び後ろ蹴りを放つ。

「早く逃げろ！！」

男にそう言ってから賊が多く集まっている集団に殴りかかる。

「何だこいつ！？」
「何でもいい、たった一人だ！やっちまえ！！」

いっせいに襲いかかってく賊どもにおれも突っ込む。
まず先頭の男の顎をなぐり折る。
すぐさま他の奴らの剣を手甲で受け流し、ながら気を込めた拳を腹にいれて数人纏めて吹き飛ばす。
次々襲ってくる賊どもに時には避け、受け流し、カウンターを叩き込む。
椿は戦いながら自分の力に驚いていた。
以前から気を使った攻撃で相手を吹き飛ばすことはできた。
だが、今の様に五人や六人を巻き込み、その上気絶させるようなとこは出来なかった。

「ば、化けもんだ！？」
「逃げろ！殺される！！」
「おい早くし「ぎゃぁぁー！」どうした！」
「う、後ろから呂布が来てます！！」
「なっ！？」

恋も来たみたいだな

「恋！俺は敵の大将をぶっ飛ばしてくる！」
「・・・・任せて」

恋は戟振るい敵をなぎ倒していく。
恋に背を向け一際大きな集団に飛び掛かる。

「ふっ！　」

呼気を吐きながら一気に気を高めて敵の武器を破壊しながら吹き飛ばす。

着地して膝を曲げた反動を使って敵に殴りかかり

すかさず敵の大将まで突っ走る。

「っひ！」

悲鳴を上げる親玉の頭を掴んで

・・・・・・・

間髪いれずそのあたまを地面に文字通りめり込ませた。

「敵将は打ち取った！我は性は鳴海、名は椿！！覚えとけ！！！」

「「「「に、逃げろー！」」」」

賊どもはちりぢりに逃げ出していった。

暫くしてから、

「・・・・・椿！」

恋が近づいてきた

「恋・・・大丈夫だった？」

「・・・・・恋は平気。」

「よかった」
「・・・・・でも椿、平気じゃない」
「っえ？」
「椿、泣いてる・・・・」

俺は顎にしたたっている物に気がついた。
最初は血かと思ったら違った。

「そうか・・・」
「・・・・・・椿？」
「俺さ、いままで人を殺したこと無かったんだ。
けど今回、人に噬って斬りかかるあいつら見てたら賊だから
殺すべきだって思って躊躇なく殺したことはずだった。」

でも違った

「ただ考えるのをやめていただけだったんだ。
今恋を見て気が落ちついて、そのことに気がついて、
涙がでたんだ。」

身体が震え出す。
今になって罪の意識がついてくる。

「俺は怖い！何も感じず殺していた自分が！今は何よりも怖い！！」

膝を抱えたい
泣き崩れそうだ

「椿！！」
「ッ！」

恋が身体をだいてくれた
「・・・・椿は大丈夫」
「えっ、」
「・・・・恋は知ってる、椿が優しいこと」

身体を離して

「・・・・・だから、椿は大丈夫」

俺を安心させる様に微笑んでくれた。
心が軽くなったように感じた。

「ありがとう・・・恋」
俺は感謝を込めて恋の頭を撫でた。

一瞬ピクリと動いてから静かに撫でられてくれた。

思いと覚悟（後書き）

恋が少し固いかもしれないけどあしからず

闘技場

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ーとある饅頭屋ー

「天の御使い？」

「ええ。有名人な占い師がながしたとかで、なんでも”天を切り裂く流星、二人の天の御使いを乗せ、天より飛来せり。その者、白く輝く衣を纏い、その輝きをもって乱世を鎮静す。其より早きに来たりし者、不運より龍の証を得、情と義により乱世に降りなす”ていうケッタイな噂が最近出てるんですよ。」

「そりゃあまた、そんなの信じる人いるんですかね？ハッハッハッハッｈａ」

「じゃあオヤジさん、饅頭十五個持ち帰りで頼むよ。」

「あいよ」

椿ｓｉｄｅ

「たぶん、あの一人は俺のことっぽいな・・・はぁっ」まあ、やっと普通の街にきて情報が集めれるんだからいいか。

ここまで村によってもあまり歓迎されず、賊退治で路銀を稼いだが

あまり実りが良いとは言えなかったしな。

「恋、お待たせ。はい、どうぞ」

「・・・・・ありがと／／」

一気に食べ始める

俺も二つだけもらい歩き出す。

「さっき饅頭屋で天の御使いの話を聞いたんだけど、恋は聞いたことがある？」

「・・・・・？（フルフル）」

「そうなんだ、まだそこまで浸透してないってことか。」

「・・・・・椿、気になるの？」

恋には話しておくか

「前に俺は違う国から来たって言ったよな。」

「・・・・コク」

「まずは俺がこの時代の人間、もしくはこの世界の住人ではないって事・・」

「・・・・・？？」

「意味がわからないと思う。けど、でも恋には知っておいて欲しいんだ。

たぶん俺は今後広がる天の御使いって呼ばれてる一人だとおもう。」

「・・・・よくわからない」

「そうだね、俺もよくはわからないや。でもこの事はナイショにしてて欲しいんだけどいいかな？」

「・・・・なんで？」

「俺・・・・・目立つの嫌いなんだよね～。だから黙っといてね。」

「・・・・・コクコク」

「ありがとな、恋」

「・・・・・ん／／／」

恋の頭を撫でる。
ここ一週間ほどで恋が頭を撫でられるのが好きなことがわかった。
だから俺は機会があればなるべく撫でるようにしている

さて、
「洛陽に行くには路銀がが足りないし、この辺は賊もほとんど出ないみたいだしどこかで働かないとね。」
「・・・・・コク」
「何かいい所はないか・・・」

二人で頭を悩ませる

「そこの人、待ってくだされ」
「？。俺の事ですか？」
「ええ。みたところお金にお困りなようで」

振り向くと年配の男にが話しかけて来た

「だったらなんだってんだよ」
「いえいえ、良い話しがあるんですが聞きますかね。」
「ほぉ。なんだよそれは」
「これ以上は、私は今懐が寂しいんですよ」

「わかった。これでいいか？」
「へい、まいど。へっへっへ」「じゃあ早く教えてくれ」
オッサンのニヤけ顔なんてみたくないんだよ！

「それがですね、ここの県令が好き者らしく、館で奴隷を使った闘技場があるんですよ。そこで腕の覚えのある者に参加費をとって奴隷の強さによって懸賞金をかけてるんですよ。朝廷の高官が見ないふりをして大きな賭博もしているようで、いい稼ぎどころですぜ」
「奴隷だと？ふざけるな！そんな物が認められてるとでもいうのか！！
「なにを言ってるんですか旦那？　いくら禁止されてても破産した農民や、誘拐されて売られる奴隷なんて今どき珍しくもないじゅあないですか。それに県令や豪族の所のやつらはだいたいが重罪犯やその家族ですぜ。気にしててもせんのないことじゃないですか。」
この時代にきて最大のカルチャーショックだった。
「それじゃあ今紹介された闘技場の奴隷は・・・」
「そいつらは大概誘拐されたりして売られる奴らですね、さっき言った重罪犯の家族なんかは耕作させられてるようですぜ」
男はこちらを見ながら様子を伺っている
「・・・・わかった。もう少しその闘技場のことについて教えてくれ」
俺と恋は教えてもらった県令の館についた

「・・・・椿、どうするの？」
「俺はさ、さっきも言ったけど違う世界から来たんだ。俺がいた国じゃ奴隷は絶対許されないものだったんだ。だから俺には誘拐されてこんな所ではたらかされてる人がいるって言うなら、その知ってる人だけでも助けたいんだ。」
「・・・・手伝う」
「ありがと・・・でも今回は今までとは違う意味で危険だ。自分で言うのもなんだがれっきとした犯罪だ。だから中には主犯の俺だけでいく。恋は騒ぎが起きて逃げてきた人達が出て来たらみんなを引き連れて先に洛陽に向かう街道で待ってて、俺も一通り暴れたあと逃げ遅れを拾ってから追いつくから。」
「・・・・・コク」
「念のためこのマントをかぶっといて、見つかったらめんどうだからね」

恋に先ほど買ったフードつきのマントを渡す

「じゅあ行ってくる」

「あの～すいません～」
「何用かな？」
「武芸者を集めてると聞いてきたのですが・・・」「ああ、それな

らば合言葉を聞いてるだろう。」
「はい、天地の性、我々を貴となす。」
「了解した。ついてまいられよ」
とりあえずうまく潜入できたか。

屋敷の奥に入り部屋に通され暫く、
「貴様が今回の挑戦者か」
恰幅のいい豚もどき、もとい県令が出てきた

「我の名は柱葱。よくぞまいった。」
「はっ」
「して其方はどのように望む？」
「では上位三名の者たちと同時にて」
「バカをいうでない！！我が奴隷どもはこれまで数々の猛者を屠ってきたのだ！
貴様が如き小僧がほざくでない！！」
「しかし、わたしが負ければあなた様の奴隷となりましょう。」
「・・ほう」

考える素振りを見せる柱葱（豚）

「そこまで言うならよほど自信があると見える。だが先ほどの言葉忘れるでないぞ」
「もちろんです・・」

「彼奴ら三人をつれてまいれ！」

「「はっ！

裏庭には掘り三メートルほど、縦横十五メートル程の闘技場があった。

「それではどちらかが降参、もしくは戦闘不能になれば負けとする！」

俺は剣を借りて闘技場に飛び降りる
目の前には若い二人の男と一人若い女だ。

「私は性は張。名は燕！」
とりあえず偽名を使っておく

「名は除昂いざ参る」
「名は呂劫！参る」
「名は大史慈！いきます！」

三人が一斉に斬りかかる。
俺は剣を使い受け流しよけつづける
だが使い勝手が悪い剣ではすぐに追い詰められる。

「どうした！あれだけ言ってその程度か！」
豚が叫んでいる

俺は攻勢にでて近くの徐昂に鍔迫り合いに持ち込み二人がこないよう壁に背をつけて話しかける

「おい。聞け」
「なんだ！」
「俺は一度負け奴隷になる。そのあとすぐ抜け出しお前達を解放する」
「なっ！」
「二度はいわない。他の奴らで信用できる奴をお前の方で集めておけ」

言って俺は剣を押し返す。

「いくぞ！」

おれは突進して斬りかかり数合打ち合ったあと除昂に首に剣をかけられ降参した

闘技場（後書き）

オリキャラ

徐晃

性格　少し無愛想。直感なんかで物事を決めやすい。義に熱い

能力　大ぶりの剣を使い、スピードとパワーのバランスがよく闘技場では負けなしのＮＯ．１。統率力もありリーダー的存在

呂劫

性格　細かい所を気にしすぎる性分

能力　徐晃に次ぐＮｏ．２。大小の二刀を使うスピード重視。

大史慈　”注意”原作を知らないので口調や性格はかわります

性格　基本は優しう女性。怒ると殺気が酷い。

能力　剣を使えるが弓を得意とする。

逃亡×救出

徐晃ｓｉｄｅ

俺は奴がいう通り、呂刧、太史滋を始めとさた信用出来る面子を集めさっきの話しをした。

「信じられないよそんなこと！」

「ああ、苦し紛れに言ったんじゃないのか？」

「別に信じないなら信じなくてもいい。だが俺は奴を信じる。」

「えっ」

「なっ！」

太史滋と呂刧は驚愕した顔をする

「正気か徐昂！？だいたい今頃やつは拷問を受けているはずだ！逃げれるはずがない」

「だがな、俺はあいつにかけて見たいんだよ呂刧。さっき奴は俺達三人相手に手加減していた」

「そっ、そんなはずない！確かに身体能力はあったけど剣の腕はたいしたことなかったよ！」

「俺も剣の腕はおざなりだと思ったが、奴は本来剣は使わないんだろう。」

「なんでそんなことがわかる」

「勘だ」

全員呆れ返っていた

ドッゴーーン！！！！

「「「「「！！！！！」」」」」

「やっぱりな・・・」

口元が勝手ににやける

「何だ今の音は！」

「わかりません」

「早く確かめて来い！」

「わかりました。・・・きさま！なぜこ「ぶはぁっ」」

一迅の風が吹き、周りの兵を蹴散らしながら牢の鍵を奪い、それは鉄格子を開く

「助けにきたぞ！！」

「ああ、まってたよ」

俺は突然現れた男の手をとった。

椿ｓｉｄｅ

勝負の後、手足に鎖をつけられつるし上げられてから一時間近く数人の男たちに殴られ蹴られ続けた。

「たくっ、いって～なー」

見張りが交代でいないことを確認して気が失った振りを止め起き上がる

実際の所は硬気功でずっと耐えていたので痛いものは痛いが筋肉や骨には全くといっていいほどダメージはなかったのだが

（させ、どうするか・・）

鉄鋼や鉄履、鎖帷子は恋に預けているから大丈夫だが問題は

「他のやつらと違うところに入れられたってことだよなぁ～。捜すのめんど。」

とりあえず牢屋を出るか・・

「はぁ！」

バキンッ！

今までになく両手に本気で気を練りこむ思いっきり引きちぎる。

「でやぁ！」

鉄格子に向かって渾身の後ろ蹴りを放つ！

ドッゴーーン！！！！

（やり過ぎたか・・・）

鉄格子が曲がり牢の石垣を崩してしまった。

（とにかく急ごう）

扉を開け他の牢屋を捜す

ん？あそこっぽいな。

見張りが立ち右往左往している場所がみえる

「邪魔だ！」

俺は速攻で兵を気絶させていき牢屋を見つけた。

偉そうに鍵を持って指揮しているやつを叩いて鍵を奪い取り開錠する。

「助けにきたぞ！！」

「ああ、まってたよ」

当然のように言うこいつにおもわず笑ってしまった。

「これからどうするんだ」

徐昂がきいてきた。

「ああ、仲間が外で待機しているからお前たちを先に逃がして俺は殿を務める。他に助けたいものがいる者はいるか！」

反応はない。肯定ということでいいか。

「なら急げ時間が「ちょっと待って！」。・・なに？」

女、確か太子慈だったか。

「なんでいきなりあなたは私たちを助けようとおもったの！？私はどうしてもなっとくできない！」

時間がないのにまったく。

「理由なんてない！ただ街でお前たちのことを聞いて同情して助けちまっただけだ！！同情がいらないって奴がいるならそいつらは残ればいい！なんでもいいからここから出たいと思う奴は俺を信じてついて来い！！」

「俺は行くぞ。」

徐昂が進みでる。

「まあこんなとこで一生を過ごすよりはいいか。俺もついていこう。」

呂刧が追随する。

「俺もだ！」

「こんなとこで死ぬなんて絶対いやだ」

「同情だろうがなんでもいい！俺は自由に生きたい！」

太史慈は少しふくれた顔になって

「わ、私だって外にでたいよ！でもいきなりで信じられなかっただけなの。」

と一応納得してくれたようだ。

「時間がもったいないからもうでるぞ！先頭は徐昂、呂刧、太史慈。まず武器庫で自分の武器を確保後、一直線に外に向かう！行くぞ！！」

「「「「「応う！」」」」」

俺は後ろくる奴らをあしらいながら進んでいく

「武器庫鍵がかかってます！！」

「お前ら少しどいてろ」

扉ごと蹴りとばす。

「早く武器を持て！次々やってくるぞ！」

「武器さえあればこっちのもんですよ」

「ああ。あんなにわか兵士にまけるっ！」

元奴隷たちは武器を手に取ってすぐ兵士に向かい始めた。

「あまり相手にせずにまず逃げることを最優先にしろ！殿は俺が勤めるから背中は任せとけ！！」

「「了解！」」

今度こそ俺たちは脱出した。

恋ｓｉｄｅ

椿が屋敷に入ってからだいぶ時間がたった。

恋は心配で気が気じゃいられない。

椿が強いことは知ってるけど万が一ということもある。

今の恋には一分一秒がとてつもなく長かった。

ドッゴーーン！！！！

（・・・！！）

なにか大きなおとが聞こえてきた。

しだいに屋敷中が騒がしくなり始めた。

きっと椿が暴れ始めたんだろう。

暫くしてんかから人が出始めた。
それを確認して恋は駆け出した。

一番近くの女の人に話しかける
「・・・・・ついてきて」
「えっ、あなたがあの人が言ってた仲間のひとですか！？」
「・・・・・（コク）」
「わかった。みんな！この娘のあとについてきて！！」
「・・・・・遠いから走る。」

言って恋は先頭を走りはじめる。
「はやいっ、みんな！本気で走らないとおいていかれそうだからがんばって！」
「「「「応う！」」」」
周りも少し遅れて追いかけ始める。

（・・・・椿、大丈夫かな？）

恋は走りながらも心配しつづけた。

椿ｓｉｄｅ

全員屋敷を抜けたな。
俺は周囲を確認してから恋達に追いつくために走り出す。

一刻ほど走り恋達に追いつく

「全員無事か確認しろ！」
まずはみんなの安否を確かめなきゃな
「全員無事です！」

確認していた徐晃が答えてくれた

「ならもう少し行った所に食いもんが届いているはずだから休むのはもう少し辛抱してくれ！」
あの情報をくれたオッサンに依頼して数日分の食料は買い揃えて有る

みんなにそう促した
一通りの事が終わったので恋の所に向かう

「恋ただいま」

「・・・・椿！」

恋に呼びかけたら物凄い勢いで近くにきた

「・・・・大丈夫？」

「ああ、たいした怪我はないよ」

「・・・・でも、顔が腫れてる」

たぶん拷問の時のが今ごろ腫れてるきたんだろう。

硬気功は筋肉を固めるワザだし、顔とか筋肉がないとこはしょうがない。

「こんなの明日には治るよ」

安心させようと恋の頭手を伸ばそうとしたが

「・・・・・椿、無茶はダメ！！」

恋が今にも泣きそうに顔を歪めていて、

俺は手を止めていた

「ど、どうしたの恋？！」

あわてて恋に聞く

「・・・・今の椿、キライ」

「な、なんで？」

今度は俺が泣きそうになる。

「・・・・・椿、恋が知らない所で死ぬかと思った」
・・・・
「・・・考えてると”ここ”が痛くなる。だからキライ」
恋は胸を握りしめるながらいってくる

そんな恋が可愛くて、いじらしくて、
俺は恋を抱き寄せた。

「・・・・・！！」
「ごめん恋、心配かけて・・・」
「・・・・・（ぽ～）」
「今度はあまり無茶はしないよ。しても恋の見える所にいるからそれでいい？」
「・・・・・・（コクコク）」
「・・・抱き寄せられたのはイヤだった」
「・・・・・（フルフル）」
「じゃあもう少しこのままでも良いかな？」
「・・・・（コクコクコク）」

俺は抱き寄せたのとは反対の手で髪を撫でる

「あの～そろそろ現実に戻ってきてくれませんか～」

大史慈達がすまなそうに声をかけてくる

'・' ハッ'・'

俺は一気に我にかえり恋から離れる
恋が少し物足りなそうにしていたけど今はしょうがなかった

「あ～、う、うん。じゃ、じゃあ早く移動するか！」

俺はいままでの事がなかったかのように歩きだす

周りの奴らも薄ら笑いを浮かべながら歩き出した

（いい雰囲気だったのに～（泣））

こうして男は一人心で鳴いた。

逃亡×救出（後書き）

感想よろしくお願いしま～す

間章（前書き）

リンダリンダ～リンダリンダリンダ～

間章

呂劫ｓｉｄｅ

「じゃあなにか？本当に何にも考えずに俺たちを助け、その後の事は何も考えてなかったと？」

「あ～、まぁそーいうことかな」

言われて椿は申し訳なさそうにする

ちなみにすでに俺たち含め二十二名は名を預けている。

と言っても自分を含めほとんどの者が幼い頃に売られたので真名を持たない。

椿も張燕は偽名らしいがこれからはそれで通し、性の鳴海を字に名の椿は真名として使うらしい。

「はぁ～っ、あなた達はこれからはどうするつもりだったんです？こちらも助けられたからにはあなた達についていくのもいいんですよ。

徐晃もそのつもりのようですし」

「まあな」

こいつはすぐ直感で物事を決めたがる。

だが、こいつの勘は意外と信用できる。

「それでこれからどうするつもりだったんですか？」

「俺は恋が仕えている董卓って人の所で士官しようと思ってるんだ。」

「それならば俺達もあなたと共に士官しましょう」

「他のヤツらはどうなんだ？」

「みんな同じくようなもんですよ。
ほとんど剣にしか生きられないような奴ばかりだ。
むしろ士官の話しは願ったり叶ったりですよ。」
「まぁそーいうことならいいよ。これからよろしくな」

椿side

思いがけず大所帯になってきたな
街でも稼げずきに来ちまったしな
こりゃあ早く洛陽につかなきゃ金がやばい。

「みんな～、食い物は数日分しかないからちかくの村までなるべく急ぐぞ」

俺は皆を急かして一行を引き連れていく。

「恋も悪いんだけど何日かは食べる量を我慢してね。」
「・・・・・（コクコク）」
気を落としながらも頷いてくれる。
ちらちら食料を見てるそんな恋がまたかわいい～

恋をあたたかい目でながめていると

「ちょっといいか大将。」

「どうした徐晃。って、俺のことか大将って？」
「俺たちみたいなのを引きつけてるんだ、間違ってはないだろ？
そんなことより大将は武器は何を使うんだ？剣じゃないんだろ」

ああ、そのことか

「基本的に俺は素手で戦うんだよ」
「素手？確かに大将の体術は凄かった。けど、素手で猛者と戦うのはきつくないのか？
まずは防御が取れない」
「それはそうだが、おれは本来は手甲に鉄履、あとは鎖帷子を付けてるから防御は問題ないんだ。
今回は捕まることが前提だったから取りあげられて捜すのがめんどうだから外していただけだよ。

そして徐晃は少し考えてから聞いてきた

「ならば洛陽に着いたら一度俺と本気で戦ってくれないか？」
「なんでだ？」
「一度自分の大将の実力を直に味わっておきたい。
それにこの集団で今までは俺が頭だったからな、他の奴らもそこのところが気になるだろう。」

確かにいきなり現れた俺についていくのに不安があるやつはいるだろうが、
実力を知ってる徐昂に勝てるのならば納得しやすくなるだろう。

「わかった。洛陽について落ち着いたらでもいいか？」
「了解だ」

「そーいえば椿さんっていくつなんですか？私たちと同じくらいか年上に見えるんですけど実際どうなんですか？」
太史慈が現れて聞いてくる
「俺も気になるなるな、どうなんです大将」
「・・・・恋もしらない」
みんな食いついてきたな
「なんだなんだ。そんなに俺って年齢がわかりにくか？

少し不満げに言ってみる

「だって椿さん横顔や後ろ姿とかは年上に見えるけど、雰囲気とか顔もよ～く見たら私たちぐらいじゃないですか」
「そうか？」
「はい」
「・・・・（コクコク）」

「俺は今年で１４だ」

「「「・・・はいっ？！（っ！？）」」」

「いや、だから１４歳だって」

「た、大将って成人してなかったんですか？」
「さ、さすがに予想してませんでした・・・」
「・・・・恋より年下？」
珍しく恋まで動揺していた

そ、そこまで俺ってふけてみえたのか・・
あと恋、一周間以上いっしょにいたのにそんなに意外だったの？
おもわずヒザが地に着いた

「お、お前らそこまで意外か？」

「「「意外です（・・・意外）！！」」」

ちなみに恋は１５歳らしい

（まぁ恋と年がちかかったしいっかな～）

こうして一行は一直線に洛陽を目指すのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9185t/

真・恋姫無双　～龍紋背負いし者～

2011年6月12日03時27分発行